８月７日セミナーリフレクション

講　師：小牧市立小木小学校長　中川裕子先生

小牧市立小牧中学校　　安齋　藍先生

テーマ「豊かに生きるを、音楽科から考える」

音楽は目に見えない、瞬間に消えるもの、それを「認識」させるのは、すごくむずかしい。いつも自分が悩むところです。 この授業では、ボールによって、全員が「音」を「形」で捉え、例えば図形楽譜にしたときに「フルートの音」「ヴァイオリンの音」「ハープの音」が、どこのどれの音なのか確実にわかっていた、そこがすごいと思う。 また、真剣に耳を傾ける子どもたち「ボールを動かすために聴き入っている」＝「音楽を感じるために」聴いている。ここも、すごい！ 私の授業では「ふりかえり」や「紹介文を書くために」聴いている。➡「わかったふりをしている子を育てている」と反省しました。 この授業の子どもたちは、本当に「わかっている」と思います。
安齋先生の思いが、単元構成（音楽の要素と情景と作曲者の想いという）にもよく表れていてすばらしいと思いました。 先生の熱意と子ども一人ひとりのよさを大切にしようとする姿勢があふれている授業でした。子どもの、「ハープとフルートどっちの音かがわからない」という、わからなさから、各音の音色や音楽的な要素と情景を結び付けているところ、私もこんなつながりと深まりのある授業をしたいと思いました。 このあと、子どもたちの調べ学習も含め、どんな展開がされるか、ぜひ教えてほしいです。 私も、我が祖国を構成する全曲を聴いてみたくなりました。
私は小学校で音楽を教えていて、はじめて中学校の授業を拝見させていただきましたが、話し合いの上手さにとても驚いています。 音の可視化、これについては私もとても重要視していて、小学生は楽器の名前すらも知らないところから授業に入るので、よく色画用紙でカードにして、利用したりしています。 図形楽譜も小学生は指で追うのが精一杯ですが、中学生は自分で図に表すことができることに、びっくりしました。ピンポン玉を動かしてからの図形化が、うまくつながれたのかなと感じました。 グループに一台のタブレットで、音を聞くというのも、初めて見ましたが、逆に集中して聴けているなという印象を受けました。 私も、授業中しゃべりすぎてしまっているなと反省しました。子どもから、こうやってどんどん意見が出てくる話し合いができるような授業を目指して頑張りたいと思いました。 今日は、貴重な勉強をさせていただき、ありがとうございました。
小学校教員時代、鑑賞の評価の方法に悩みました。結局、豊かな鑑賞のための力を育てることもできずに、その子が、すでにもっていた感性を評価していただけでした。どのようにしたら、鑑賞の力を伸ばすことができるかと考えてきましたが、今日のセミナーにて、多くのことを学ばせていただきました。

今回のセミナーを通して、二つの指導法が必要だと気づきました。それらを構成と分析の二つに分類しました。

構成とは、生徒一人一人がその音楽を聞いて、イメージを膨らませることです。ただ、一人でイメージを膨らませても、限界があります。友達と関わり合うことを通して、構成された曲のイメージが膨らんでいきます。

今日のセミナーの最初に、参加者の３人グループでブルタバを聞いて話し合いました。自分のイメージを言葉で表したとき、同じグループのメンバーが同意してくれました。曲から得られるイメージは、あくまで個人的な活動のはずです。しかし、同意してくれたということは、自分の存在を認めてもらえたという喜びになります。一方、その中で、自分とは少し異なる意見が出たとき、もう一度自分の考えを思い起こし、相違点を考えます。そして、より深い鑑賞へと発展します。８割は共感だけど、２割は私の個性だと感じられたとき、他人に対する尊敬と共に、自分の個性を認めることができると思います。

その構成ができるようになるためには、分析という手法が必要です。今回、この分析の手法を学ぶことができました。一つ目は、楽器のそれぞれの音色から、その楽器のイメージをふくらませることです。私が教員になったころは、鑑賞曲はレコード、テープ、CD でした。10 年ぐらい経ったとき、レーザーディスクを用いて、鑑賞することができるようになりました。「おもちゃのシンフォニー」を聞いたとき、カッコウ笛やおもちゃのラッパを吹くオーケストラの人々を見て、子供たちよりも私が一番感動しました。音でしか知らなかった音色を出す楽器を初めて知ることができました。二つ目は、ピンポンの球を動かすという方法です。何かを手にもつということで、表現しようという意欲につながります。鑑賞の時間に、指揮者になってごらんと言って、指揮をさせていました。子どもたちは、音の強弱に合わせて、指揮の身振りを変えていました。しかし、素手ではなく、指揮棒を持たせることで、意欲化が図れたと反省しています。三つ目は、図形楽譜です。書いた楽譜が形として残せて、他の人と共有できるという点で優れたものだと思います。このような三つの分析的な手法を用いて、鑑賞の力を育てて行くことが可能だと思います。

分析的な手法で育てた鑑賞の力と、構成的な方法とで、鑑賞曲の良さを味合うことができます。そして、グループ学習で他の人との交流を通して、より高い次元の鑑賞へと高まっていくのだと思います。

何かができるということを教育の目標にして、私は努力してきたと思います。これからの時代の教育は、人生を豊かに生きる術を与える教育だと思います。

さっそく、「ブルタバ」の全曲を、聞いてみます。ありがとうございました。

リトミックボール、知りませんでした。卓球のボールを代用して、何をするのかなと思っていたのですが、安斎先生のことば「旋律の動き、音楽の動きを表現させるのに、手では、なかなか上手くいかないけれど、ボールを使うと、ボールに気持ちが集中してうまくいくんではないか・・・」と聞き、なるほど！ボールに自己を投影したということですね。手は自分自身ですから、代わりに動かすというわけにはいかないのでしょうか？

個人的には、先生と生徒さんたちの語りの美しさ、深さに感動しました。あれは、どうしたらできるのかな？

音源、映像をながすタイミングがとてもいいと思いました。 「音楽の要素」をさりげなく確認されていた。積み重ねですね。 リトミックボール、面白かった。 先生の姿勢、考え方がとても立派で見習いたい。
とても素晴らしい学び合う姿に感動しました。 子どもに、アートとして音楽の学びを生むために、“聴覚”と“聴覚”を媒介として、最後に“視覚”をもっていった授業デザインと学びの構造が最高でした。 ビデオを見返すたびに、グループの対話の中で新たな発見、新たな世界との出会いがありました。ありがとうございました。
子どもの姿が、全てを物語っています。素晴らしかったです。 木村先生がおっしゃったように、音源に戻す（グループ活動の前、全体の学びの前、発言が続いた後）ことが想像につながる。 この曲を聴いた後、仲間の発言を聴いた後、グループにして共有することで、全員が個々のイメージをもっている。 前半がグループで、後半が全体の学びという変なセオリーが小牧にあるとしたら、子どもの学びの姿を優先すべきである。 すべてに、安齋先生の子どもをリスペクトする姿、愛を感じました。やはり、「愛」ですよね。 最後に、私は国語科なので、詩や俳句をよく読んでいます。文学は分かろうとせず、感じる、頭ではなく、心。情景を思い浮かべるだけでなく、そこから自分が何を感じているか、その感じたことを音読で自分の中に入れるということに挑戦中です。子どもの反応は楽しいですね。
自分がブルタバの授業をやってみて、子どもが落ちていくのが何故だろう。どうしたらいいのだろう。と悩んでいました。 安齋先生の授業を拝見して、曲の聴き方が分からなかったのかということに気づきました。一つひとつ分析することで、情景も浮かぶし、聴くポイントをわからせてあげることで、意見を言いたくなるのだと思います。 早く私も授業がしたくなってきました。音楽の要素に触れながら、表現する楽しさを味わえるような授業にしたいです。勉強になりました。
グループの活動の様子、全体での共有の時の子どもの発言のつながりから、学び合いができていることを感じました。どうしたら、子どもが意見をつなげていけるようになるのか疑問に思いました。 今回のセミナーで、他の先生方と話し合って、ここをまねしてみたい！と思うことが沢山ありました。自分の授業に取り入れることができるところは、どんどん取り入れていきたいと思いました。 安齋先生の話を聴いて、子どもが自分は価値があると知ることができるのは、今回の授業のようなグループ活動などの学び合いであると思う。子どもたが、そう思えるようになるため、自分の授業では何ができるのかを考えさせられました。まだまだ、答えは出ていないでので、他の先生方の意見もたくさん聞いて試行錯誤していたい。
ピンポン球について、今年度から指揮を取り入れたことによって、歌唱曲や鑑賞曲で感じた

こと、表したいことを「指揮で表現してみて」と子どもたちに言うことが何度もありました。しかし、指揮の技量がなかったり、自分の身体を使って表現することに抵抗があったりで、上手くいきませんでした。ピンポン球をつかうと、その悩みも解消できるのではないかと思い、実践してみたいなと感じました。 　ブルタバについては、２時間の中で、７場面すべてを聴かせていましたが、時間に追われてグループ、全体共有があまりできていませんでした。すべてに重きをおくのでなく、一場面を取り上げ、深く考えさせ、新たな出会いを感じさせる授業ができるようになりたいと思いました。
安齋先生が音楽を通して子どもたちをどう育てたいかという思いを知ることができました。子どもたち同士の柔らな関りだけでなく、先生と子どもたちとの関りも温かいものだなと、改めて感じました。 　ボールによる体感からはじまり、音から情景を想像するという展開でしたが、自分はブルタバ（モルダウ）に対してなにも知識がない中で、最初に情景をイメージしました。そして、子どもたちと一緒に授業を受けていました。音から情景をイメージした子どもたちの深い考えに触れることで、もう一度、オーケストラの映像の音を聴きました。すると、最初のイメージと全然ちがい、音から情景をイメージすることの素晴らしさを体感しました。 　一時間の授業で、新たな発見と自分の少しの成長を感じました。こんな授業をしたいという気持ちを強くしてくれた実践でした。本当にありがとうございました。学校で、この授業について語り合いたいです。その時はよろしくお願いします。
ピンポン球をつかって、音楽と一体化している授業を始めて拝見しました。 鑑賞というと、ぼんやり聞いて感想を書いて終わりという、イメージがありましたが、どんな楽器が使われていて、どんな働きをしていて、情景はどうなのか・・・と掘り下げて聴いていくと、とても面白かったです。 　安齋先生が、子どもの言葉から「旋律」「音色」と音楽の要素と結び付けられていたところがすばらしいと思いました。聴いてイメージしたことを、音楽要素と一致させることが大切だと勉強させていただきました。私も、実際に授業をうけっせてもらっている感覚で、楽しかったです。
鑑賞の視点をもたせる活動の大切さを学ぶことができました。表現活動をあきらめるのではなく、演奏から知覚したものを言葉で共有するために、表現活動が必要であることも驚きでした。 　音楽領域を分けて授業をするのではなく、組み合わせながら単元を組めるように頑張りたいと思いました。
今日、実際の授業の様子をビデオで見せていただいて、本当に感動しました。 リトミックを取り入れたことにより、表現することに抵抗なく動かす生徒たち、一台のタブレットに集中して聴き合うグループの様子などから、生徒同士の関係性のよさを感じました。 また、先生が聴く視点をあたえることにより、生徒たちが何をするのかが明確になり、音を視覚化させたうえで情景を考えさせるという流れが、自然にできていて、本当にすごいと思いました。

「どの音から、そう思ったの」というように、音に戻って考えている発言ばかりで、音を細かく聴きこませることによる学びが生まれているなと思いました。また、学期ごとに情景を聴いていく中で、生徒の中から二つの楽器の重なりという発言が出てきたことも驚きました。

安齋先生のお話から、わからないことから始める授業、一人ひとりの個性が生かされる授業を目指して、私もがんばろうと思いました。ありましたが、

音楽の授業で、学び合いで大切なことを再確認できました。２学期の授業をどうしよう。とこの夏休みに授業を組み立てるのが、すごく楽しみになりました。

やっているつもりでしたが、もっともっと話し合い➡音楽に戻すを心がけたいです。

ボールを使うことで、これまで子ども同士、一生懸命擬音などを使って（フルートの音はこれ・・・など）わかり合おうとしていたところに、目で見て、動きで共有し合える手段が増えました。取り入れてみたいです。

鑑賞の授業は、いつも迷いながら行っていました。小学生は、もっと聴けない子が多い。でも、リトミックボールやスカーフを使用することで、音を可視化し、それを他の人にも伝えることができると分かりました。ぜひ、すぐにやってみたいと思いました。

音楽的要素と情景をつなげることで、より深まった感想が言えると感じました。
自分の好きな曲の良さにまでになるといいなと思いました。ありがとうございました。

自分の鑑賞の授業は、曲を紹介して感想を書くというような何の工夫も見られないもので、日々、どうしたものかと思いながらも、繰り返しでした。校長先生から、「こういうセミナーがあるからどうだ。」と紹介され、内容を読ませていただくと、毎年、自分がマンネリ化している「ブルタバ」の授業の研修ができるということで、大変興味をもち、私のようなものが参加するのは場違いかもと思いながら、勇気を出して申し込みました。

安齋先生の授業、研究協議での先生方の意見を聴き、本当に勉強になりました。そして、自分の今までの指導を反省するとともに、９月からの授業に生かしていきたいと思います。

今日は、本当にありがとうございました。

安齋先生の言葉がとても素敵だと思いました。「旅に行く」「川下りをしていきましょう」など、先生が一番音楽に入り込んでいて、その姿が生徒たちの発言や行動につながっているんだなと思いました。

音楽は、能力の差が顕著に出ると言われますが、ボールを使って旋律の流れを理解しやすくしたり、そこから情景を想像したりと、最初から最後まで誰も取りこぼさない工夫がされていてとても勉強になりました。

曲を聴いて考えをもち、曲に戻ることが大切だと授業を見て実感したので、音楽だけでなく意識して授業をしていきたいです。授業や先生方の協議からたくさん学びました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

私自身どちらかというと、音楽は避けて通りたい教科ではあります。何の楽器なのか？何のリズムなのか？何の調子なのか？正直言えば、さっぱりわからないという感じです。だからこそ、少しでもと思い参加させていただきました。

そこで、一番強く感じたことは、どの教科であっても同じということでした。どう教材研究していくべきか、どう子ども同士をつないでいくべきなのか。どう、仕掛けていくべきなのか。

音楽だから特別というわけではなく、同じであるということ。そして、教師の手立てによって、子ども同士でも変身していくということを目のあたりにさせられました。 　私自身のことを話しすぎましたが、安齋先生のおっしゃったように、できる限り子ども同士でつながっていけるよう、指導していきつつ、我慢していくべきだと思いました。
お若い安齋先生の企画力の高い授業。 小牧市の学び合いに、ただただ感動しています。学ばせていただいたことを、現場で子どもたちのためにどう生かしていくか、じっくり考えていきたいと思います。 ありがとうございました。
すばらしい取り組みだと思いました。 身体表現を通して、音楽を捉えてもらうことで自分の感性に、自分の感性に深く気づき、そして自信がもてるように思いました。 　楽器のテクスチュアに深い理解を得て、それが、音楽全体への興味につながっています。自分が、どのような感受性をもっているのかを、アウトプットすることは、受け止めてくれる他者を信頼していく道になります。相互の存在を認め合う体験が、個の尊重に発展してゆきます。 　私にとりまして、深い学びの体験になりました。感謝いたします。
生徒たちは、実はいろいろなことがわかっていなかった。　➡　ボールを使って表現してみた。ここにつなげたことがすごいと思いました。 　ボールを動かす様子が、音楽に包まれている空間を作り出していた。(あんなに素敵な空間になるとは、思っていませんでした。) 　生徒たちが、モヤモヤすることに価値があると思っていたが、スッキリ理解させてあげることもとても重要だと思いました。 　これまで、情景のイメージだけで終わったり、音楽の要素の気づきだけで終わってしまたりしていたが、この二つを、つなげること、また、この二つをつなげる力を生徒につけさせることに挑戦していかなければと思いました。大変勉強になりました。ありがとうございました。
鑑賞の授業を通して、子どもたちに「音楽に親しむ気持ち」を引き出そうとする安齋先生の想いを感じました。 　いつも「育てる」という意識が私は強いのですが、先生は本来子どもが持っているものを「引き出す」のがとても素敵だと思います。 　特に、子ども同士がどんどん意見をつなげていって、世界が広がっていくというのを、私も子どもと一緒にできたらと思います。 　ぜひ、今後の展開もお話を聴きたいです。